

謝こそすれ、不満なことは何一つないと思うべし。

## 私の抑留体験

愛知県 堀内俊彦

### 出生から入隊

大正十五（一九二六）年四月二十二日 神戸市にて出生

昭和二十（一九四五）年一月 日鉄鉱業㈱に入社  
北支河北省武安鉱山に赴任

同年 四月 北支派遣軍独立歩兵第四四大隊  
（衣第四二九六部隊）機関銃中隊に現地入営

### 終戦を迎えた場所

北朝鮮 咸興（内地防衛のため移動中に転進した）

### シベリア抑留地への移動と帰還

東京ダモイと騙され興南から貨物船に乗せられウラジオストックで上陸

- ① 昭和二十年十月初め、ウラジオストックから約五十キロメートル離れた所へ収容された
- ② 同 二十一年十一月ころ 炭鉱のある近くの収容所に転属

- ③ 同 二十二年二月下旬 ウラジオストック市内の収容所に転属

- ④ 同 二十三年四月初め ナホトカ郊外の第二労働大隊に転属

- ⑤ 同 二十四年九月二日 舞鶴に上陸 復員

### 抑留された時の状況

終戦になると、「我々の部隊は現地の日本人を内地へ無事帰還させる任務につく」ということで小学校に集結させられ、そこで武装解除させられた。

しかし、何もせず何日か過ぎた日の夕刻、突如

集合がかかり無蓋貨車に乗せられた。「東京ダモイだ」と言う。九月半ばとはいえ、日が落ちた後夏服ではうす寒く、風邪をひかないか心配したが間もなく降ろされた。こんなことが二度ほどあった。

ある日、朝食後に大きな握り飯が一人当たり六個ほど配られ、港の岸壁に集合させられた。「東京ダモイ」だと言う。だが一向に乗船の気配がない。その間にソ連兵が革の長靴を脱がしたり、時計や万年筆を略奪し始めた。中には手首から腕まで十数個の時計をしているソ連兵もいた。朝配られた握り飯を食べ横になったが、足を伸ばすことはできなかった。

翌朝目を覚まして驚いた。船は左に陸を見ながら進んでいる。日本ではなく北に向かっていた。船の上では食料の配給がなかった。乗船前にたくさん配られた握り飯が下船するまでの食事だったらしいが、我々はそうとは知らずとくに食べてしまっていた。腹が減って仕方がないので尻の下

の袋をこじ開け、米やコウリヤンや魚の干物を見つからない程度にかじった。

三日目に港に着いた。ウラジオストックだ。そして興南ではクレーンで積んだ荷物を我々が全部肩に担いで船から降ろした。荷役設備がないのだ。夕食に握り飯が配られた。

夜遅く我々が眠っている船倉に、酒に酔ったソ連の将校がピストルを手にして「時計を出せ」と言って入って来た。毛布をはがしてピストルをかざすので恐ろしかった。

翌日上陸し、隊伍を組んで市中を行進した。市街地を離れたころ夕方になり、小高い丘の草の上で野営をした。朝起きると、かけていた毛布の上が霜で真っ白になっていて驚いた。水が十分になるので飯盒の飯はうまく炊けず、半煮えの糠臭い飯で食えなかった。

ソ連兵に促されて歩き始めたが、疲れて隊伍を組むことはできなかった。私たち体力のない者が最初にトラクターに繋がれた荷台に乗ることがで

きたが、これが物凄く遅く、後からトラックに乗った者に次々追い越され、収容所に到着したのは最後で夜八時ころだった。朝から飲まず食わずだったので、おかずは即席味噌だったが、飯盒に一杯ほどの飯をかき込んだ。旨かった。そして抑留生活が始まった。

### 最初の収容所

ここは、すぐ前にあるレンガ工場の従業員（囚人？）用の建物のようであったが、既に有刺鉄線で囲まれ四隅には望楼があった。部隊編成のまま三百人くらいが収容された。

中は入り口にベーチカがあり、三段のいわゆるカイコ棚だった。このベッドにたくさんの南京虫がいて、夜寝ているときに上からポタポタ落ちて来て大変だった。

将校を除いた部隊編成のまま収容されたので古参兵が最上段で起居し、雑用を初年兵に命令し、作業の配分も食事の分配も支配したため、初年兵

の体力の消耗はひどかった。

二カ月ほどたつて五十人ほどが他の収容所に転属になったので、三段のベッドが新しい二段になり、南京虫はいなくなり、古参兵の支配も緩んできた。さらに翌春、この人たちが戻って来たときには転属先の人も混じり階級意識もなくなっていたので、収容所の雰囲気は一層和やかになってきた。

作業は、初めはレンガ工場の清掃や操業の準備だったが、それが終わると昼夜連続の操業に入った。ミキサーから出てくる粘土をレンガの大きさに切る仕事をさせられたが、力が弱くてできなかった。そこで窯入れ・窯出しをさせられたが、横幅二メートルほどの棚が十段あり高さが四メートルほどの台車にレンガを積んで数人で運ぶので、これも大変な力を要し、運搬中に粘土や製品が棚から落ちるので難儀をしたし体力を消耗した。

昭和二十年暮れ、ソ連の女医の身体検査で○・

K（オカ）になり、翌年春まで所内の軽作業に従事した。

昭和二十一年春、体力が回復すると、収容所のすぐ近くの建築中の家で大工や左官の助手をした。ここは屋内の仕事だったし、ソ連人二、三人と日本人三人で仕事をしたので環境が良く作業も楽だった。

やがてレンガ工場内の仕事はソ連人がするようになり、我々は工場内や工場からレンガ置き場への運搬、トラックへの積込みと積卸し、貨車への積込み等に従事した。

十一月ごろ収容所が閉鎖になり、我々は幾つかの収容所に分散した。私は建築現場で仕事をしてきた人たちと一緒に、さほど離れていない所にある炭鉱の収容所に転属した。

## 二番目の収容所

この収容所は炭鉱の敷地内であって、人数は前の所と同じくらいだった。坑内作業は三交代で

していたが、私たち転属して来た三人は昼間だけの作業だった。

主な仕事は、炭鉱の中で石炭を運搬したり、それをトロッコで地上に運ぶ仕事だった。

炭鉱の作業は専門学校で勉強していたので、（大っぴらには言わなかったが）地圧で坑内の笠木が折れたり、地盤が隆起して石炭を運び出すトロッコが斜坑の天井に当たって通れなくなったりは、事故が起こるのではないかと心配したが幸いにも事故はなかった。

年が明けた二月下旬、炭鉱が閉鎖になり私も転属になったのでホッとしました。私たちは日勤だった収容所としてのノルマが良かったためか、食事は以前の所より良かったようだった。三交代で坑内作業をしている者は、成績によって五百グラムや七百五十グラムの黒パンが支給されていたので羨ましかった。時には支給されたタバコと交換したこともあった（七百五十グラムのパンを続けて支給された者は食べきれないでいた）。

### 三番目の収容所

昭和二十二年二月下旬、転属する十人ほどが、近くの駅からウラジオストックまで列車に乗って移動した。二番目の収容所は期間が短く作業も小人数のグループだったので、一緒に転属した人は知らない人ばかりだった。

収容所は市内の高台にあった（一九九六年九月、ツアー旅行でウラジオストックへ行つたとき、周囲の地形からその場所が現在の「鷲の巣展望台」の北にあったことが確認できた）。建物は木造で倉庫のようだった。

作業場は収容所から徒歩で十五分くらい坂を下った所にあるレンガ造りのビルで、最初は縦横四・五メートル、深さ三メートルほどの穴を掘る仕事だった。二月下旬のウラジオは地面がガチガチに凍っていて、ツルハシでもバールでも掘れない。焚き火で地面を溶かして掘ろうとしたら、「仕事をしないで焚き火に当たっている」とソ連の監督にひどくしかられた。そのうち作業が困難

なことが理解され穴掘りは中止になり、建築材料の運搬などをしていた。

五月ころになると、縦四メートル、横三メートル、深さ一・五メートルほどの木製の容器の中へ生石灰を入れ、水を加えて消石灰の液にする仕事をした。この消石灰は建物の壁に塗るセメントに加えたり、壁の塗料にするものだった。仕事は私ともう一人の二人だけが専門に従事し、その場所は作業現場の隅の歩哨の監視も少ない場所だったので、手が荒れたり石灰まみれになったが大変気楽だった。

十一月に入り消石灰の液が凍るようになるとこの仕事も終わりになって、再び建築材料の運搬や雑用をした。この建物は七階建てで床面積も広かったが、柱に鉄骨を使うこともなく、レンガを積み重ねるだけで、寒くなってレンガを固定するメントが凍っても一向に構わず積み上げていた。（一九九六年に訪れたとき、建物はなかった）

また、この作業場は不十分とはいえないが

たので厳冬期も乗り切ることができたが、収容所が丘の上にあったので、真冬の風の強い日の夕暮れに風に向かって帰るときは、マスク代わりにしているタオルが自分の息で凍りつき、鼻の穴もバリバリになり、シベリアの寒さを身をもって体験した。

この収容所は大都市の中にあつたためか、一年ほどの間に二度浴場へ行かせてくれ、市中の映画館で映画を見せたり、別の作業場へ行つたとき回りを道をしてバザールを見せたことがあつた。

#### 四番目の収容所

昭和二十三年四月初め、「トーキョーダモイ」と言うので喜んでナホトカヘトラックで移動したが、着いた所は港から遠く離れた丘の上で、周辺には建物もない所だつた。

この収容所に来るときは日本へ帰るといふことでトラックに乗つたが、ソ連が気候を理由に引揚げ開始を延期したため労働大隊に編入されたの

だ。

最初にしたことは、大きな袋に野積みしている干し草を詰め込むことだつた。これは今夜から寝る敷き布団で、もう一つ作つた小さい方は枕、次に百人くらいが入れるテントを二張り立て、ここで寝ることになつたが、四月初めのナホトカの夜は冷え込み、着のみ着のまま、あるだけの毛布をかけ、重なるようになって寒くて寝られなかつた。

間もなく収容所が有刺鉄線で囲まれ態勢が整うと、我々で一辺が七・八メートルの家をブロックで十戸ほど建て、そこで起居するようになった。

作業場は収容所から歩いて三十分くらい離れたところにあり、労働歌やソ連の歌を歌いながら往復した。この作業は港湾建設と建築資材作りで、どちらも港に隣接した広場が作業場だつた。

港湾建設は三立方メートルくらいの大きなコンクリートブロックを作る仕事で、これを作るための碎石や練つたセメントを運ぶ仕事、建築用資材は

コンクリート製の杭や階段や床のパネル、石炭ガラでブロックを作る作業等だった。

私は主に建築用の資材作りをしていた。振動する鉄板の上に置いた木枠の中へ鉄筋を置き、流し込んだセメントを振動によってつき固める仕組みで、四人か六人一組でしていた。このころになるとロシア語も若干理解できたし、作業の内容も単純でさほど危険なこともなく（時々指を挟んで爪を剥がしたことはあった）、仕事の要領も上手くなってロスケから煩わしく言われることは少なくなった。ウラジオの建築現場でこんなパネルを使っていたのを思い出していた。また護岸用のコントクリートブロック作りに使っていた筒状のバイブレーターや、港の裏山を削っていたブルトラーを見たのは初めてで、その威力には驚いた。作業現場は海岸べりにあったので、冬を除いて二、三日ごとに入港する引揚船を見るたびに帰る日を待ち望んでいた。だが、近くの停車場で貨車から降りる人たちが、何日もかかってやっと到着

したと言うのを聞いたとき、奥地から順に帰国するのであれば我々は最後だなと諦めた。望郷の念かられた、やるせない一年五カ月だった。

昭和二十四年春、ソ連の関係者に一人ずつ呼ばれて経歴の調査があった。出身地、軍隊での様子、抑留されてからのことなどすべて知っていて、その確認のようだった。その結果、四月になって収容所のほとんどの者は帰還準備の収容所へ移動したが、衣師団と中支の一三軍に属していた者、残留希望者が残された。衣と一三軍は支那で悪事をしたからということだった。

結局四カ月引き延ばされて八月末に帰国することになったが、この間は今までの作業所へは行かず、我々が退去した後に入居するソ連人のために建物内の改装などの仕事をした。

## 民主教育

ソ連帰りⅡ赤Ⅱ共産主義者という考えが戦後の一時期、日本の社会で常識化されていた。これは

引揚者の共産党集団入党運動や、抑留中に受けた民主運動や反軍・反天皇制運動が伝えられていたためと思う。

私も、抑留者に読ませるためにソ連で発行していた「日本新聞」が、昭和二十三年ころから回し読みされるようになってから、日米関係や日本国内の動向をソ連の見方で知るようになり、「日本新聞」やハバロフスクで民主運動のリーダー教育を受けた人たちによって、「マルクス・レーニン主義」とか「弁証法的唯物論」といった言葉を知り、天皇制反対教育を受けたり、反動分子の吊るし上げに参加したこともあったが、私が過ごした最初の収容所で既に軍隊組織はなくなり、次々と移動するたびに知り合った人たちと別れ別れになったので、このような民主運動が起こっても周囲の人を意識することなく、適当に参加していた。

しかしながら、上記の風潮によって、復員後の就職には大いに支障を来した。

#### ダモイ「帰国」

昭和二十四年八月下旬、ようやく帰国の知らせがあって帰還準備の収容所へ移動した。四年ぶりに日本式の入浴をし、サッパリして出てきた所は入り口と反対側で、そこには新しい肌着と上着が置いてあった。

乗船する組分けがされ、八月三十日、「明優丸」に乗船、夕刻出航していよいよ本当に帰国できるのだと思った。貨物室に何段にも造った木製の床に三泊して、九月二日早朝、舞鶴港外に停泊した。

小さい船に乗り換えて木製の引揚棧橋から上陸し、元海軍の建物らしい宿舎に入った。入浴して出てきたら、頭も体も真っ白になるまでDDT（殺虫剤）を吹きかけられ、今度も真新しい衣服に着替えさせられた。二度の着替えで持ち物はすべてなくなってしまった。

一人ずつ順番にアメリカ兵に呼び出され、収容所周辺や作業所へ通う道路にあった建物や地形に



ついで聞かれたが、私が気がつかなかったことも知っていてびっくりした。

滞在中に何種類もの予防注射や種痘をされた。

レンガ工場やウラジオストックの収容所にいたときに、赤十字の捕虜通信を出したことがあり、被災していないと思って、古新コシンのすゑ子さん宛にハガキを出していたのが両親に届いており、私がソ連に抑留されていることは知っていたが、私は収容所を何度も移動したので両親からの返事を受け取ったことがなく、身内の消息は全く知らなかった。だから、舞鶴引揚援護局に届け出する帰宅先を取りあえず古新の堀内にしておいたので、援護局からの連絡や新聞報道が古新へ届き、叔母から両親に知らせが届いた。

その後援護局へ両親からの連絡が来ているのが分かったが、葉書の住所が一通は垂水、もう一通は須磨になっていたので垂水へ帰ることにして、そこまでの乗車券を交付してもらった。

「以下、父の日記より」

九月七日六時三十分、トラックで東舞鶴駅へ着くと、両親、貴美子、すゑ子の四人が出迎えてくれた。

七時十八分発の引揚者用列車に揃って乗車、一時三十分大阪駅着、駅のホームに加藤秀雄、黒田知好、野勢シナさんが出迎えてくれた。(知好さん、シナさんは初対面だった)

大阪駅で電車に乗り換え、知好さん、シナさんも一緒に二時三十分、神戸駅に到着した。

駅のホームには兵庫区長が迎えに来ていて、出迎への義保さん、太郎さんに声をかける間もなくタクシーに押し込められ、下祇園町の家へ着いた。木下家からも大勢来ていて、合わせて二十人ほどが夕方五時ころまで帰還を祝ってくれた。

#### 四年間の生活の総括

収容所の事務係が「起床」と叫びながら各部屋を回ると、ムックリとベッドの上に身を起こし、

あたりを見回してお互いの無事を確認する。係が人員を確認し、体調の悪い者は申し出て作業を休み、所内の軽作業をする。

シャツや袴下（パッチ）は昼も夜も着たまま、パンツやフンドシははいてないから着替える必要がない。頭は丸刈りだから髪を解かす必要がない。第一、櫛がない。頭髪はシラミがわくといけないので時々手動のバリカンで刈ってもらったが、カミソリがないのでヒゲは剃ったことがない。爪は医務室で切ったかもしれないがよく覚えていない。それより、作業中に指を挟んで爪が取れたことが度々あった。両手と足の親指の爪は全部生えかわった。栄養不良だから髪もヒゲも爪も伸びなかった。

収容所には水道も井戸もない。水は炊事係が馬車に積んだドラム缶で遠くの井戸から運んでいた。飲み水以外に使える水はないに等しかった。だから洗面所がない。歯ブラシも歯磨きもないから歯は磨かない。部屋の当番が汲んできたバ

ケツの水で顔を洗うときもあるが、うがいはいらない。トイレへ行っても水は置いてない。寒くなると水が凍ると何もできない。電灯は部屋に裸の白熱灯が一個。暖房はペーチカ（レンガで造った暖炉）。燃料はマキか石炭、冬は寝る前にたくさん入れておくと朝まで何とか暖かかった。

当番が運んで来た朝飯をかき込んで「作業整列」まで横になる。メシは元日本兵やソ連兵の飯盒や缶詰の空き缶に取っ手をつけた物に入れてもらい、自分らで作った木やアルミのスプーンで食べる。木のスプーンは、拾った木切れを作業の休憩中や収容所でソ連兵に見つからないように刃物やガラスのかけらで削って作る。刃物は金鋸の刃をグラインダーで研いだ物だ。アルミのスプーンは金属工場へ行っている者が作っていて、それが欲しいと、ソ連人にもらったり節約した配給のタバコと交換した。

前に書いたが、食事は朝晩は飯盒に半分ほどの雑炊、昼は三五〇グラムくらいの黒パン、これが

毎日毎日続いた。量も質もほとんど変わらず四年間続いた。雑炊は百人分くらいを一つの釜でかき混ぜながら煮るので、中へ入れたサケやジャガイモは原型がない。歯に挟まる物や噛みごたえのある物を食べたことがない。たまに砂糖の入っていない紅茶のようなものが出たこともあったが、たいはいは水か湯冷まし。煎茶やコーヒーがある訳がない。量も質も変わらないから腹を壊すこともなかった。

作業は朝九時から夕方五時までだったが、時計がないので時間が分からない。お昼や夕方はどこかで鳴るサイレンや、作業所によってはレールの切れ端を吊るしていて、それを金づちで叩いて時間を知らせていた。賃金はなし。たとえもらっても使うことができなかった。

夕食が終わっても風呂はない。消灯までの間、親しい人たちとその日の出来事や故郷の話をするものがあつたが、食べ物の話ばかりだった。民主運動で吊るし上げられるので軍隊時代の話はしな

い。結婚していた人もいたが、家族の話はほとんどしない。二十代の若者が女の話しもしない性欲もない。去勢されたような異常な四年間の青春時代だった。

四年間の厳しい抑留に耐えて無事帰国できたのは、幸運に恵まれ、基礎体力と生命力があつたことに尽きると思う。レンガ工場にいたときに、肛門周囲炎で立つこともできなかったときは、旧軍隊の衛生兵の素早い処置のお陰で数日のうちに治癒したし、ナホトカで発熱から肺炎になったときは、十分な休養で大事にならないうちに回復した。

無事に帰国しても、一家の主であつた人が、家族のために衰えた身体にもかかわらず無理して働いたため、結核に罹つた人を知っている。

私は古新の叔父叔母のお陰で、短期間のうちに体力を回復することができ、大いに感謝している。

## 帰国後の生活

ソ連から無事帰還したものの、栄養失調で体重は五十キログラムもないほどになっており、日鉄鉱業は終戦とともに解雇され、父が頼んでいた三井倉庫への就職も決まる様子がないので、就職先が決まるまで晒工場を手伝うということで、昭和二十四年十一月から兵庫県印南郡（現高砂市）米田町古新の晒工場での生活が始まった。

晒工場は昭和十年ころ、木山懸司さんと太郎叔父が始めた事業で、「ボロ」（古い布）を漂白して機械や兵器の手入れに使うウエスに再生していた。

私が引き揚げてきてから古新にいる間も、父は三井倉庫をはじめ東洋棉花、大正海上、住友倉庫といった、いわゆる一流会社の知人に就職を依頼してくれていたが、新卒でなければ駄目とか、思想とか家庭事情を保証する人が必要とか、私の何気ない返事が面接者に不快感を与えたとか、いろ

んな理由で採用を拒否された。が、その根底には、この年にソ連引揚者の共産党集団入党、三鷹事件、松川事件などがあり、ソ連帰り⇨赤⇨組合活動という経営者の警戒心があったのだと思う。

その後、諸々の経緯で運よく台糖㈱に入社できたので、台糖ファイザー㈱に転籍になった後も、私がソ連からの引揚者であることは上司、同僚にも一切話をしなかった。一時、職場の組合委員に選ばれたことがあったり、安保改定や反戦運動で組合の活動が活発だったときに総務の仕事をしていたが、組合活動には全く関与しなかった。

抑留の労苦について語るようになったのは定年退職になってからである。

古新での一年半余りの間、叔父叔母をはじめ木山家の人たちや親戚の方々に大変お世話になった。また、私がソ連から引き揚げるときに帰宅先を叔父宅にしていた関係から、村の人にも私のこ

とが知れ渡っていたのであろうか、多くの人たちから親切にしていた。お二人がいなかったら私はどうなっていたか分らないと思う。栄養失調の体も数カ月で回復し、注文していた服は仮縫いのときもでき上がった時も窮屈になるほどだった。

## シベリア抑留記

愛知県 太田 吉 春

### 一、出生から入隊

大正十一（一九二二）年一月二十日 岐阜県岐

阜市加納本町に生まれる

昭和十二（一九三七）年九月 国鉄に入社と同時に名古屋電気学校夜間部に入學

昭和十五年九月 名古屋電気学校夜間部卒業

昭和十七年 徴兵検査で第一乙、甲種編入

### 二、ソ連軍侵攻前

昭和十八年二月一日

鹿島電信五連隊を経て、軍服を着用して北支那方面軍電信一〇連隊に現地入隊（済南の白馬山）

昭和十九年

天津にて自動車工手の修業を済ませてすぐ、新郷の独立歩兵四旅団に転属（兵器勤務隊）

旅団司令部の電話交換所長として勤む

このころ、あるときアメリカのP51戦闘機の爆撃を受け、下士官一人、兵六人戦死

### 三、ソ連軍侵攻

昭和二十年八月

満州の洮南へ転属し、しばらくして新設第一三八師団要員として吉林の指導大学へ転属命令を受け、まず吉林の市公司へ着きました。そこで目にした公報板で「ソ連軍が洮南進駐」の報を知る。それは私が洮南を出て七時間後のことでした。